

東海道品川宿

東海道の首駅

徳川家康は、江戸と各地を結ぶため諸街道を整備し、宿場を設置した。慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦で勝利を収めた家康は、その翌年正月、東海道に宿場を設けて伝馬の提供を義務付けた朱印状を出し、輸送用の馬と人足を常備させた。その後整備された宿場も含め、江戸と京都の間に53の宿が設けられたので、東海道五十三次という。

品川宿が公用の旅行者に提供する人馬は、1日に100人・100疋で、それ以上に必要な場合は助郷に指定された周辺の村々から召集された。宿場には駕籠舁や馬士も多くおり、それらの人馬継立を問屋場で行った。

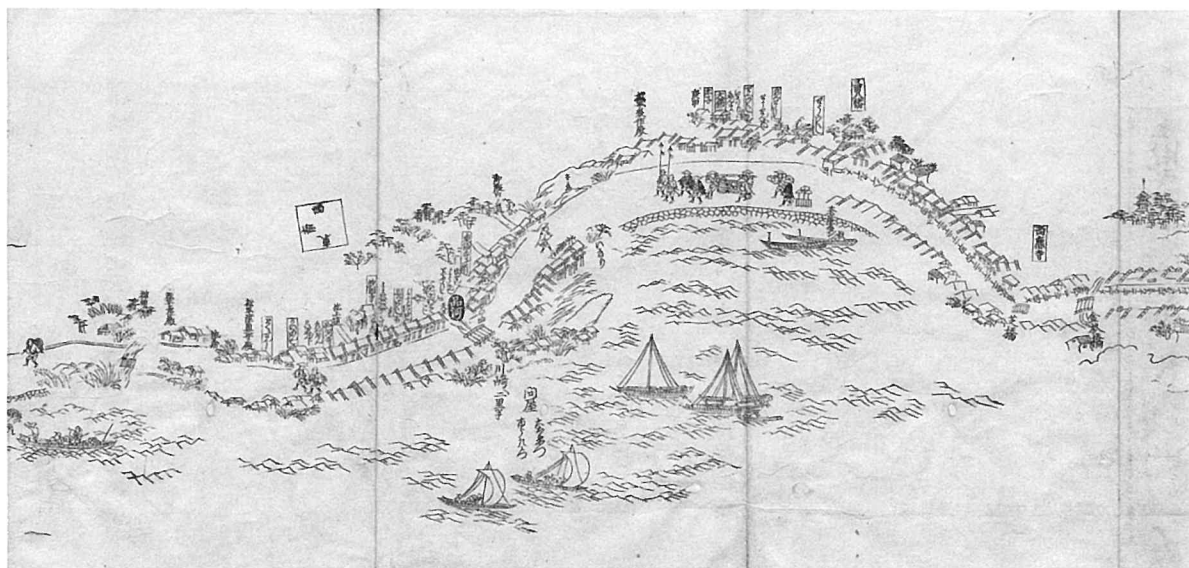
品川宿は、目黒川（品川）を境として南北の2宿で成り立っていたが、享保7年（1722）、北品川宿の北側に歩行新宿が加わり、3宿で宿場の任にあたった。歩行新宿という名称は、宿場が負担する伝馬と歩行人足のうち、歩行人足のみを負担する新しい宿であることに由来す



▲「江戸名所図会」に描かれた品川宿

る。この「新宿」に対し、以前より存在した南北2宿を「本宿」と呼んだ。

五街道（東海道、中山道、日光・奥州道中、甲州道中）のそれぞれ第一番目の宿場（品川、板橋、千住、内藤新宿）を、「江戸四宿」という。品川宿は、唯一海に接する風光明媚な立地にあり、人々の往来が多く、最も賑わった宿場だった。そのため、旅籠屋や茶屋が多く建てられたほか、遊興に来る客を接待する女性も多く、天保14年（1843）3月の品川宿の記録には、食売女（飯盛女）を抱えた旅籠屋（食売旅籠屋）が92軒あった（「宿方明細書上帳」）。品川宿は、昼夜を問わず賑わっていたのである。



▲東海道分間絵図（品川部分）遠近道印作 菱川師宣画

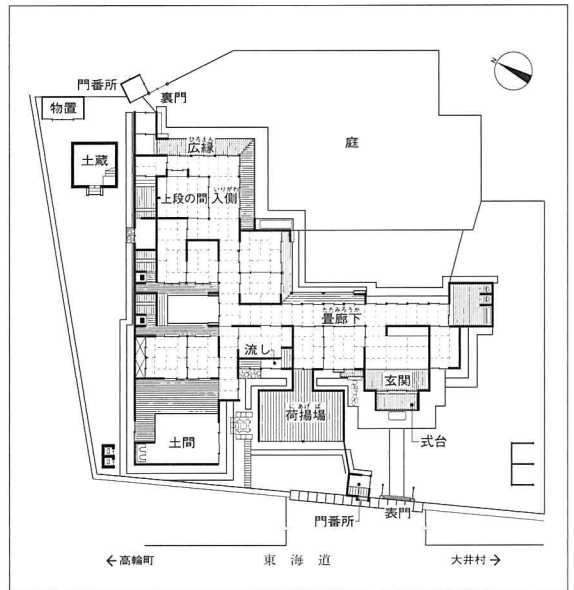
宿泊施設

宿場の宿泊施設には、本陣、脇本陣、旅籠屋、木賃宿がある。天保14年(1843)、幕府道中奉行が実施した五街道の宿駅調査によると、北品川宿に本陣が1軒、南品川宿と歩行新宿に脇本陣が1軒ずつあった。本陣は勅使・公家・大名・幕府役人・高僧など位の高いものが宿泊する施設であり、庶民は利用できなかった。脇本陣は本陣の予備として建てられた施設で、本陣が満室の時に利用された。

旅籠屋、木賃宿は、主に庶民の旅人に利用された。両者の違いは食事の提供の有無であり、旅籠屋は食事が提供されるが、木賃宿は糧米を持参し、燃料を買い求めて自炊する必要があった。18世紀以降は木賃宿が減り、大部分の人は旅籠屋に宿泊した。

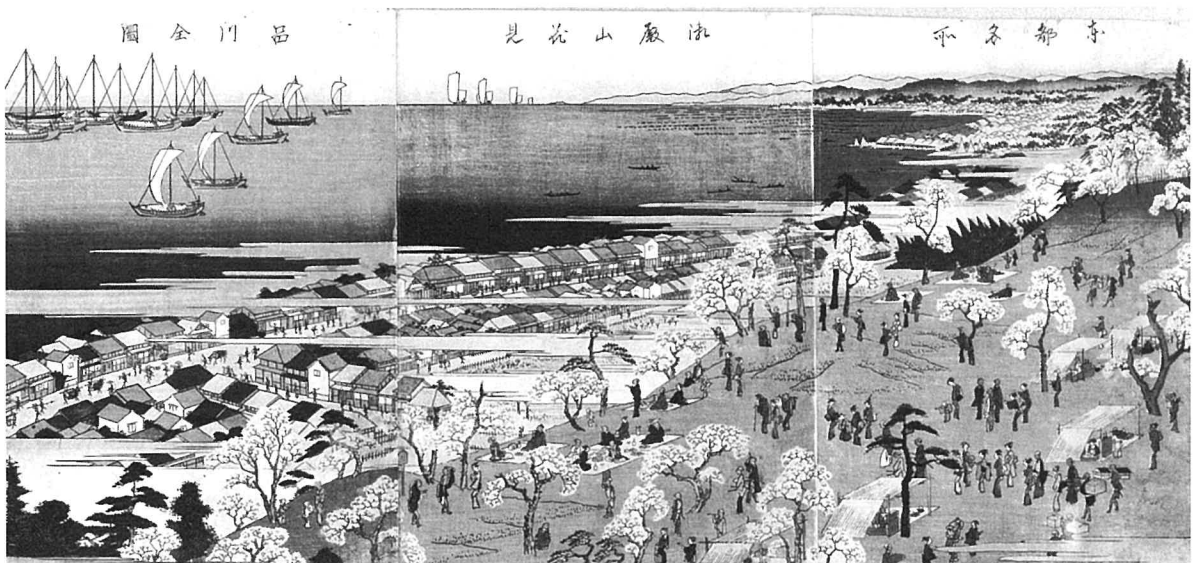
品川宿の名主

名主役は村政全般を司った役職で、主に土地の有力者が世襲した。品川宿にも名主が置かれ、南品川宿の利田家、北品川宿の宇田川家、南品川宿に属した南品川獺師町の大島家がそれぞれ単独で世襲した。歩行新宿は飯田家と名村家が相名主(複数人で名主を務めること)の形態を



▲本陣建物図

とっていたが、後に飯田家の単独世襲となった。宇田川家は、太田道灌の江戸城築城に伴い、長禄元年(1457)に日比谷郷から品川に移って館を構えたとされ、飯田家と北品川宿の鎮守・北品川稲荷社(現・品川神社)の神主小泉家とは親戚筋にあたる。一方、利田家のルーツは、戦国期の中ごろに港町品川で活躍した鳥海氏の一族とされ、のちに利田と改姓したといわれている。



▲東都名所 御殿山花見 品川全図 歌川広重(初代)画 桜の名所として賑わう御殿山の背後に、品川宿の町並みが続く